

ストライク・ザ・ブラッド 真祖の妹の妹

桐響 蒼歌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第四真祖、暁古城の監視役として姫終雪菜が向かった。その補助役として少女。遠山綾花も絃神島へ向かった。だがその少女には…

現在書き直し中

目次

プロローグ	1
魔族特区	4

プロローグ

真夏の森

深夜の神社境内を、煌々と燃える篝火が照らしている。

御殿に差しこんでいるのは淡い月光。

季節を忘れるほどに空気が冷たく張り詰めているのは社を包む境界のせいだろう。

騒がしかった虫たちの鳴き声も、今はもうほとんど聞こえない。

少女は無言で、広い御殿の中央の座っている。

まだ幼さを残しているが、綺麗な顔立ちの娘である。

細身で華奢だが、儂げな印象はない。むしろ元気いっぱいでも言うような顔である。

そのように見えるのはパツチリと開いた目や、周りを気にしているような表情のせいかもしれないが。

少女が身につけているのは、関西にある私立中学の制服。

神道系の名門校だが、そこが獅子王機関の下部組織だと知る者は多くない。

御殿には三人の先客がいる。

御簾に遮られて姿は見えない。

しかし彼らの正体は、少女にも事前知らされている。

“三聖”と呼ばれる、獅子王機関の長老たちである。

いずれも最高位の霊能力者、あるいは魔術師でありながら、彼らを取り巻く気配は静謐で威圧感がまるでない。

少女は御簾をじっと見ている。そして

「名乗りなさい」

御簾の向こう側から声が聞こえた。

口調は厳かだが、冷たさを感じない。

想像していたよりも若い声だった。

どこか笑いを含んだ女の声だ。

「遠山…遠山綾花」

小さい声で囁くように少女は答えた。

そして御簾の向こうにいる女は気にせず質問を続ける。

「年は？」

「…十五」

「そう…遠山綾花。修行を始めたのは、四年前ね。あなたが機関に連れてこられた日の事を覚えてる？」

「獅子王機関」に来る前の記憶は私には無い。

「いえ、覚えておりません」

やはり囁くような小さい声で答えた。

「では、本題に入りましょうか」

その言葉とともに御簾の隙間からなにかが現れた。

それは一羽の蝶だった。

音もなく羽ばたいて綾花の前に着地すると、蝶は一枚の写真へと変わる。

写っていたのは、高校の制服を着た一人の男子生徒と中学の制服を着た女子生徒だった。

その姿は見たことが無いはずなのに記憶にある男の子が成長したらこうなるだろうと思う姿だった。

「…これ…は？」

「暁古城というのが彼の名前です。知っていますか？」

「…わからない…です」

生まれてから一度も見たことが無いはずなのに記憶に残っている姿。

でもなにか大切だったものの様な気もする。

だが考えていると急に頭が痛くなってくる。

「彼のこちを、どう思いますか？」

「…わから…ない…です」

「…そう、ではあなたには彼の監視役になっていただきます。

彼の居る場所は東京と絃神市——ギガフロート人工島の「魔族特区」にいます。

もう一人監視役として任命した姫柊雪菜と共に監視するように」

そう話しながらまた御簾の隙間から先程と同じように蝶が飛

び、一枚の写真に変わる。

それは幼さが少しあるが、綺麗な顔立ちの娘であった。

「彼女が姫柊雪菜さんですか？」

「ええ、そうよ。彼女に詳しい話は聞いてください。…それとこれを」

巻き上げた御簾の隙間から、女がなにかを差し出した。篝火に照らされ、闇の中に浮かぶ上がるものは小さなナイフ。

最低限魔族と戦えるように準備された物らしい。

本来渡すための武器はまだ準備が出来ていないらしく、代わりにこれを渡すとの事だ。

だがそれ以上に気になったのはビニールに包まれた制服だった。

それは白と水色を基調にした、セーラー襟のブラウスとプリーツスカート。どうやら中学校の女子の夏服らしい。

「私立彩海学園高等部一年B組、出席番号一番。それが暁古城の現状の身分です。姫柊雪菜と共に彼の監視役として全力をもって彼に接近し、彼の行動を監視するように。彩海学園への転校手続きはすでに済ませておきました——以上です」

それを言い終わると御簾の向こう側に居る長老たちの気配が消えた。

そうして彼女は絃神島へ第四真祖の監視役として向かった。

魔族特区

耳元で鐘が鳴り続けていた。

古式ゆかしいアナログ式目覚まし時計のベルの音だ。

暁古城は苦悶の息を吐き、その時計を手探りで黙らせる。

そして、もぞもぞと寝返りを打ちながら、再び安らかな眠りに戻ろうとしたところで、

「古城君、起きなよ。朝だよ。目覚ましなつてたし今日も追試あるんでしょ。朝ごはん、作ってあるから早く食べちゃってよ。洗い物片付かないし。お布団も干すから早くどいて」

早口でまくし立てられた挙句にシーツを奪われ、古城は、なすすべもなく狭いベットから転げ落ちた。焦点の合わない目で見上げると、そこには見慣れた妹の姿がある。

大きな瞳が印象的な、表情の豊かな少女である。

結び上げてピンで止めた長い髪は、一見ショートカット風にも見える。

顔立ちや体つきはまだ少し幼い印象があるが、中学生の平均からはそう大きく外れていないだろう。今朝の彼女は短パンにタンクトップというラフな格好で、その上にオレンジ色のエプロンをつけている。

床に落ちたまま動かない兄を眺めて、凧沙は呆れたように腰に手を当てた。

「ほーらー、起きなよ。また寝不足？もしかして明け方まで試験勉強してたの？南宮先生にあんまり迷惑かけちゃだめだよ。後補修もサボらないでね。こないだみたいに職員室の掲示板に古城くんの名前が張り出されたりすると凧沙が恥ずかしい思いをするんだからね。あ、もう、制服のズボンが脱いだらハンガーに掛けてっていつも言ってるのに」

途切れることのない妹からのお小言を聞きながら、古城はのろのろと立ち上がる。

身内だからこそそう思うだけかもしれないが、凧沙は出来のい

い妹だ。顔立ちもそれなりに可愛らしく、成績もそこそこ。家事全般も器用にこなす。

しかしもちろん欠点もある。ひとつは病的なまでの清潔好きで、片付け魔であること。そしてもうひとつはこの口数だ。

とにかく風沙はよく喋る。誰に対してもそうするわけではないが、少なくとも心を許した家族に対しては容赦ない。ましてや口喧嘩では勝てる気がしない。

唯一の救いは風沙が裏表のない性格で、他人の悪口は滅多に口にしないことだが、そのぶん怒らせたときは恐ろしい。中学時代、エロビデオを持って遊びに来たところをうっかり見つかってしまった矢瀬が、怒り狂った風沙の苛烈な言葉責めによって、しばらく女性恐怖症になっていたほどである。

そんなことを思い出しながら、古城がぼんやりと窓の外を見てみると、

「……ねえ、古城くんってば、聞いているの!？」

風沙に早口で怒鳴られた。古城は慌てて姿勢を正す。

「ああ、悪い。なんだって？」

「もう……!」 だから、転校生だよ」

「話を聞いていなかった兄に腹を立てたのか、風沙が唇と尖らせる。

「……転校生？」

「うん。夏休み明けからうちのクラスに二人、転校生が来るの。二人とも女の子。昨日、部活で学校に行ったときに先生にしようかいしてもらったんだあ。転校前の手続きに来てたんだって。二人ともすっごく可愛い子だったよ。そのうち絶対高等部でも噂になると思うなあ。後、転校生の内の一人がすっごく私と顔が似てたの。先生に双子かどうか聞かれちゃった」

「ふうん……」

古城は素っ気ない態度で聞き流す。いくら可愛くとも、相手は中学生の。おまけに妹のクラスメイトだ。完全に古城の興味の対象外である。だがしかし、

「でね、古城君。その転校生ちゃんの内の一人に、なんかした？」

「は？　なんだそりゃ？」

唐突な風沙の質問に、古城はわけがわからず訊き返す。

転校前の転校生にいったい何ができるといいうのか。しかし風沙はどこか不機嫌そうな、真面目な表情で兄を見返し、

「だって訊かれたんだよ、その子に。私が自己紹介したら、お兄さんがいるかって、どんな人かって。その後にもう一人の転校生ちゃんに止められて、何かを見せたら動きがピタツ！って止まってたけど」

「……なんで？」

「あたしの方が訊きたいよ。てっきり古城君と前にどこかで会ったことがあるんだって思ってたんだけど」

「いや、年下の知り合いはいないと思うが……」

古城は腕を組んで考え込んだ。漠然と何か嫌な予感がする。

「で、お前はなんて答えたんだ？」

「一応ちゃんと説明しておいたけど、あることないこと」

「なにい？」

「うそうそ、本当のことしか話してないよ。この島に来る前に住んでいた街のこととか、学校の成績とか、好きな食べ物とか？好きなグラビアアイドルとか、あとは矢瀬つちとか浅葱ちゃんのこととか、あとは中等部のときの大失恋の話もしたかなあ……」

淀みなく答える風沙を睨んで、古城は苛々と奥歯を鳴らす。

「おまえな……なんで初対面の相手に、そういうことをペラペラと話すわけ？多分転校生二人ともに話したんだろ……」

「いや、だって可愛い子だったし？」

風沙は悪びれない口調で言った。予想された答えではあった。ただでさえいつ誰かと喋りたくてうずうずしている風沙に、秘密を守らせるのは至難の業なのだ。そのくせ本当に言いたいことは、決して言葉にしようとしなない難儀な性格でもあるのだが。

「女の子が古城君に興味を持つ機会なんて、滅多にないからさ、

少しでもお役に立てばと思ったんだよね。二人とも興味津々で訊いてたし」

「嘘つけ……単におまえが話したかっただけだろ」

古城は投げやりな態度で息を吐いた。寝不足で働きが鈍っていた頭の片隅に、その時ふと不吉な考えが浮かんで来る。間違っても知り合いと呼べるような関係ではないが、約一名だけ心当たりがある。古城のことを調べようとしていた可能性のある中学生に。

「ちよつと待て。その俺のことを訊いた転校生はなんて名前だ？」

「うん、なんか変わった苗字だったよ。えつと……そう、王女様みたいなヒラヒラした感じの」

「ヒラヒラ？もしかして姫柊のことか？」

ますます膨れ上がるふきつなよかんに、古城が苦々しく訊き返す。風沙が表情を明るくして、

「あ、そうそれ！姫柊雪菜ちゃん」

「……あいつが風沙のクラスの転校生……だと?！」

「そうだよ。やっぱり古城君の知り合いだったの？　ねえね

え、どこで知り合ったの？　風沙にもちちゃんと説明してよ、それに

もう一人の転校生ちゃんも知り合いなの？　ねえ。古城君つて

ば！」

風沙がなにかを叫び続けていたが、古城は聞いていなかった。

古城が考えていたのは、彼を散々付け回した挙げ句に、吸血鬼の眷獣を一撃で消滅させた、あの槍使いの少女のことだけだ。

その彼女が、古城の妹と同じクラスに転入してきたのだという。いったいどうして？　なんのために？　苦悩する古城の全身を、嫌な汗が吹き出して濡らす、

いつの間にか眠気は完全に消えていた。

おまけ

「えっと…貴女が…姫終雪菜？」

「はい、そうです。先程見せていただいた写真ですが…貴女は攻魔師ですか？」

「具体的に言う…獅子王機関の三聖に暁古城の監視をしろ…と命令されました。具体的な事は貴女に訊いてください…」

「はい、私以外にもう一人いると聞いていたので一応確認を取らせて頂きました。それなのですが…お財布落としちゃって。しばらくお金を貸して頂けませんか…？」

「わかった…じゃあしばらく一緒にいよ…それでもいい…？」

「いえ、お財布を落としてしまった私の責任ですし、いいですよ。ありがとうございます」

「じゃあ…しばらくよろしくね…えっと…ひめらぎさん」

「はい。こちらこそ。遠山さん」